



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.93

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2017年4月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://wjf4464.la.coocan.jp/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

1994年、WJF発足とともに始まった“銃に代えて楽器を！”の贈呈運動 アメリカ・ニューオリンズへの恩返し…外山夫妻の夢が膨らむ

東京九段ライオンズクラブからの寄金を受けて楽器35点が海を渡る

1994年(平成6年)7月、WJF(日本ルイ・アームストロング協会)の前身LAF(ルイ・アームストロング・ファウンデーション)日本支部が発足した直後の12月、東京九段ライオンズクラブから設立30周年記念行事として100万円の寄贈を受けた。これを基金にトランペット、トロンボーン、クラリネット、アルト・テナーサクソ計35本が購入され、ニューオリンズの子供たちへのクリスマス・プレゼントとして現地に送られた。外山喜雄・恵子夫妻が掲げる“銃に代えて楽器を！”の第1歩だった。同ライオンズクラブは、その後もWJFへの支援を続けてくれていてこの1月、WJFにアクティビティ賞として金一封を贈った。この善意にちなんで今回は、限りなく発展し続ける楽器プレゼントの歴史を振り返ってみた。(小泉良夫)



Obama, Trombone Shorty, & BB King Jam

Photo By: White House

<限りなく続けられる楽器プレゼントの歴史を振り返る>

①1994年12月、ニューオリンズの子供たちにクリスマスプレゼントとして贈呈されたのが発端となった ②寄贈された楽器の修理や調整は無償で、すべて東京・新宿のグローバル管楽器技術学院でピカピカに磨き上げられている ③外山夫妻の自宅から日本通運のご厚意でニューオリンズに発送されていく楽器たち ④楽器の寄贈を受けてスーパースターに育ったトロンボーン・ショーティー(写真中央)はオバマ大統領(左、当時)の前でBBキングらと共に共演する光栄にも浴している

トランペットに出会って偉大な一生送った“ジャズの王様”ルイ・アームストロング サッチモに倣い銃と麻薬に囲まれて暮らす子供たちを救おう！ “ネバー・エンディング・ストーリー”22年…海を渡った楽器は840点超

東京九段ライオンズクラブ 新年例会にて WJFがアクティビティ(金一封)を受賞

東京九段ライオンズクラブの新年例会が2017年1月1日、九段のホテル・グランドパレスで開催され、WJF(日本ルイ・アームストロング協会)がアクティビティ賞(金一封)の贈呈を受けた。

当日、外山喜雄WJF会長がライブ演奏のため、会報編集長の山口義憲が名代で出席、東京九段ライオンズクラブの小林栄一会長から、長年にわたる楽器を通じてのニューオリンズとの交流活動に対してアクティビティ賞(金一封)が贈呈された。受賞者を代表して山口が、「日本ルイ・アームストロング協会が活動を開始してから22年間、当初から東京九段ライオン・クラブには温かなご協力をいただき、おかげさまをもちまして、ニューオリンズへの楽器プレゼントを通じて大きな国際親善の成果を得ることができました。この場をお借りいたしました感謝の気持ちを表明させていただきます」と謝意を述べた。

同時に受賞されたのは、アフガニスタンへの風揚げを通じての支援活動、富士見小学校のフットサルチーム支援活動、同野球チームへの支援活動だった。

終了後、浅草HUBの最終ステージ、外山喜雄とデキシーセインツのライブに駆けつけ、金一封を手渡し、受賞の喜びをリクエスト曲“テネシーワルツ”で寿いだのでした。

(山口義憲記)

形見の楽器や初孫の誕生記念にと次々に 日本通運が無償でニューオリンズとの橋渡し

アメリカが世界中にプレゼントしてくれたジャズへのお礼と、外山夫妻が5年間(1968～73年)、ニューオリンズでジャズ武者修行、お世話になったアメリカへの恩返しにと、銃と麻薬、貧困に囲まれて暮らすニューオリンズのスラムの子供たちに楽器を贈る活動が会の発足と同時に始めら

れた。夫妻がこよなく愛する“ジャズの王様”ルイ・アームストロングは、少年時代に銃を発砲、少年院に収容されトランペットに出会いあの偉大な一生を送っている。

そんな偉大なルイの一生を思い出そう！銃に代えて楽器を持とう！(「Horns for Guns」) サッチモの孫たちに楽器を！のメッセージで、日本で使われず筆筒の上な

どに眠っている楽器を寄付してもらい、ニューオリンズの子供たちにプレゼントする運動はすでに22年間も続けられ、840点を超える楽器がジャズの故郷に渡った。この活動で2005年(平成17年)7月、外山さん



は外務大臣表彰を受けている。

寄贈された楽器の中には、日本のジャズ・ボーカルのトップ・グループ「タイムファイブ」でリーダーを務める勅使河原貞昭さんが寄贈してくれたトロンボーン4本、音楽劇「上海バンスキング」のモデルにもなった伝説のドラマー、故ジミー原田さんのドラムセットもあった。「ジャズの故郷で恵まれない子供たちに吹いてもらいたい」と、親族の形見の楽器を届けてくれた皆さん、娘さんが高校時代に愛用していたクラリネットを「初孫の誕生記念に、愛すべきサッチモおじさんの“お孫さん”たちに…」と送ってくれたお父さん。寄贈された一つ一つの楽器にはどれにも忘れられぬ思い出が綴られていた。

発送に当たって最初は米のユナイテッド航空が、以後は長年、日本通運が無償で引き受けてくれていた。さらに「サッチモの旅」で外山夫妻とニューオリンズを訪れた際、参加者の皆さんがそれぞれ手荷物として運び込んだものもある(写真上)。どれもこれも善意の賜物。

スーパースターになったあのトロンボーン中学生 サクソ奏者と外山夫妻の思いもよらぬ遭遇も

これらの楽器を手にした子供たちの中には、プロとして活躍しているミュージシャンも少なくない。なかでも中学生時代の2001年(平成13年)、WJFからトロンボーンを送られたトロンボーン・ショーティー(写真右)などは2012年、当時のオバマ大統領に招かれホワイトハウスでBBキング、ミック・ジャガー、パディー・ガイらとともに大統領夫妻の前で熱演するほどのスーパースターに成長している。



後述のウィルバート・ローリンズ先生の助手として次代を担ってくれると期待されていた青年だった。

ニューオリンズ日本総領事館公邸で外務大臣表彰 その直後に襲った巨大ハリケーン！壊滅的な被害

2005年7月、外山さんがWJFの活動で外務大臣表彰受け、ニューオリンズの日本総領事館公邸で楽器の授受に携わった皆さんが一堂に会して盛大なパーティーが催された。デクシーセイイツの演奏、外山夫妻を囲んで、歓談の輪も広がった。その直後の8月だった。ニューオリンズ

を超ド級のハリケーン・カトリーナが直撃、全市が壊滅的な被害を受けた。

WJFからの支援を受けて子供たちの音楽や空手教育に情熱を傾けていたフィアレス・タイガー・アート・センターの総合ディレクター、ケビン・スミスさん夫妻も総領事館のパーティーに駆けつけてくれていたが被災以後、まったく音信不通になっている。彼は毎年のように空港に子供たちを引率して姿を見せ、外山夫妻らをセカンドラ

最近、外山夫妻をまたまた驚かせたことがあった。昨年8月、夫妻がニューオリンズへ行った時のことだった。プリザベーションホールで演奏していた若いサクソ奏者が、演奏を終えると夫妻に「あなた方は“ワンダフルワールド”の方？」と問いかけてきた。「そうですよ」と答えると、その若者はパッと目を輝かせ、満面笑みを浮かべて「2001年に私はあなた方からテナーサクソをいただいているんです。それで今の私が…」と。彼の名前はカルビン・ジョンソン(写真右の中央)。プリザベーションホールのレギュラーメンバーとして活躍中。「伝統的な素晴らしい演奏を聴かせてくれていました。往年のスター・サクソ奏者、ラルフ・ジョンソンの甥御さんだったんです」と外山夫妻。彼は日本から送られてきたテナーサクソのケースに貼られていた“Wonderful World”の文字をしっかりと覚えていたのだ。外山夫妻のまいた種があちこちで成長し、花を咲かせ、果実を実らせている。

THIS INSTRUMENT IS DONATED by
"WONDERFUL WORLD JAZZ
FOUNDATION", Tokyo, Japan
A PRESENT TO THE CHILDREN OF NEW ORLEANS
FROM JAZZ FANS IN JAPAN
TO EXPRESS OUR THANKS FOR "JAZZ"
WHICH NEW ORLEANS SATCHMO AND YOUR
COUNTRY HAVE GIVEN US.
♪ WHAT A WONDERFUL WORLD, OH YES !! ♪



インで大歓迎してくれていたのに…(写真下)。

WJFが楽器を寄贈するなど支援していた G.W.カーバー高校も壊滅した。ここで音楽ディレクターをしていたウィルバート・ローリンズ先生も職を失ってしまった。

惨状を知った外山夫妻の反応は早かった。夫妻の呼び

かけで10月10日、日本で初めてとなるニューオリンズ支援コンサート「緊急サッチモ祭」がサッポロビール恵比寿麦酒記念館で開催された。このコンサートで全国のジャズファン、ジャズバンドから寄せられた義援金は1400万円にもなった。この義援金と多数の楽器

悲しい出来事もあった。2006年8月、「サッチモの旅」でニューオリンズに着いた外山夫妻から真新しいアルトサクソを受け取った際、人陰に隠れてそっと涙を流していた地元TBCブラスバンドの旗手、ブランドン・フランクリンさんが2010年(平成22年)5月、トラブルに巻き込まれて射殺されてしまったのだ。彼こそ、



器をもって夫妻は即、渡米し被災したニューオリンズのミュージシャン、学校、団体に直接届けている。

早稲田大学
ニューオリンズ
ジャズクラブ
の皆さん、サッ
チモ祭常連の
アマチュアバ
ンドの皆さんも、
毎年のように
寄付金集めのパレードに参加してくれた(写真上)。



東日本大震災ですべてを失ったジュニアバンドも「今度は私たちが恩返す番」とニューオリンズ

ハリケーンの記事も冷めやらぬ2011年(平成23年)3月11日、今度は日本を大災害が襲った。東日本大震災！この津波で気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」は、楽器はもとより、練習場などすべてを失った。自宅を流され避難所でテント生活する子供たちも少なくなかった。



そのニュースにニューオリンズがいち早く反応した。「今度は私たちが恩返す番」と人々が立ち上がってくれた。オー・ペリー・ウォーカー高校(現ランドリー・ウォーカー高校)で音楽ディレクターとなっていた、あのローリンズ先生が率先して支援コンサートを開催、善意の輪が広がっていった。

ライブハウス「ティピティナス」をもつティピティナス財団はスウィング・ドルフィンズにすべての楽器を調達してくれた。可愛いジャズバンドが復活し、温かい大きな話題となった。自身の自宅も地震による液状化現象で被災しているにもかかわらず、外山夫妻はその1ヵ月後に現地を訪れ、復活したスウィング・ドルフィンズと避難所前で感動の共演を果たしている。テレビ、新聞が殺到したことは言うまでもない。



ジャズ人形の販売などで当初から東北で支援活動を行っている仙台のライブハウス「ジャズ・ミー・ブルースnola」のオーナー佐々木孝夫さんも最大限の協力を申し出てくれていた。うつのみやジャズの街会長(スウィング・ハード・オーケストラ=ldr, tb)吉原郷之典さんも惜しみない支援を続けてくれた。

2012年(平成24年)9月、「世界から日本を発信する日本人」として、外山喜雄・恵子連名で、外国人記者の投票による、国家戦略大臣感謝状を授与されている。

日米被災地のヤングバンドが親善ジャズ交流さらにスウィング・ドルフィンズ夢のような渡米

そんな折、今度はハリケーン・カトリナと東日本大震災被災地の子供たちのバンドを交流させたい。仰天の企画が持ち上がった。日米間で外山夫妻と国際交流基金、ティピティナス財団が協力して進められていく。2012年(平成24年)10月、ローリンズ先生率いるO.P.ウォーカーズ・チョーズン・ワンズ・ブラスバンドと超人気のミュージシャン、

ドナルド・ハリスンさん率いるティピティナス・インターン・バンドが来日した。ニューオリンズのサッチモ・サマーフェストでは何度も顔を合わせているトランペットの天才少年、ジョン・マイケル・ブラドフォード

君も姿を見せた。

一行は横浜、仙台、気仙沼、石巻を回り、被災地では慰霊の演

奏、楽器を送り、送られた若い仲間たちも、にこやかに手を携えて交流した(写真左上)。さらに10月14日のサッチモ祭にも特別出演して、ヤングパワーを爆発、ファンの喝采を浴びた。

最終日、一行はバスで成田空港へ向かう途中、新宿区大久保のグローバル管楽器技術学院を訪問した。楽器輸入販売会社(株)グローバル(福田忠道会長)の系列で、全国からWJFに送られてきた中古楽器や故障、破損している楽器をすべて無償で修理、磨き上げてくれる「銃に代えて楽器を！」には欠かせない存在。楽器プレゼントの発端となった35本の楽器も、このグローバルが破格で調

達してくれていたのだ。興味津々に修理作業を見学していた一行は、学院の皆さんとも交流を果たした。

活動はさらに夢のような発展を遂げる。当時の駐日アメリカ大使、ジョン・ルースさんがツイッターにも投稿して、支援するなど大きな反響を呼び、2013年(平成25年)、アメリカ大使館「TOMODACHIイニシアティブ」の交流として、国際交流基金、ニューオリンズのティピティナス財団、日本ルイ・アームストロング協会の支援と共催によるスウィング・ドルフィンズの渡米、サッチモ・サマーフェストでの出演(前頁中央)で楽器を贈ってくれたジャズの街への感謝の訪問が実現した。

UNESCO「国際ジャズデイ」でもクローズアップ！ 内外メディアのWJF、外山夫妻の報道も奏功

翌2014年(平成26年)4月、国連ユネスコ親善大使、ハービー・ハンコック氏らジャズ界のスーパースターを迎え、大阪で開催された「では、この外山夫妻の活動が中心的なテーマとしてクローズアップされた。夫妻はこのデイ・プログラムのオープニングファンファーレの演奏まで託された(写真上)。



この国際的な反響を生んだ背景には、英字紙ジャパントाइムズが「Torn apart by disaster, bound by jazz」などと何度も大きくこの運動を取り上げてくれたからだった。ニューオリンズでは地元紙「タイムズ・ペキュン」紙の名物コラムニスト、シーラ・ストロウプ記者が、外山夫妻の渡米の際、いつも密着してくれて長文の感動的な記事を素晴らしい写真入りで掲載してくれた。ヘラルド・トリビューン紙も2008年にインターナショナル版で報道している。

日本では、WJF発足間もない1994年8月、読売新聞朝刊が先陣を切り、12月には毎日新聞夕刊も大々的に報道してくれた。朝日新聞は2006、2008年の報道などに次いで何度もインフォメーションコラムを掲載している。産経新聞も論説委員のコラム、神奈川版トップなどで扱った。夕刊フジはタブロイド判1ページ全面を使った特集記事を20数回にわたって掲載したほか、外山さん



による「サッチモ英雄伝説」の連載、夫妻の渡米ニュース、サッチモ祭、例会の告知など多数。東北、関東の地方紙もイベントの都度、こぞってニュース報道してくれている。夫妻とセインツが地方でイベントに参加するたび、それらのニュース記事を読むのが楽しみになってしまった。

日本経済新聞、聖教新聞、時事通信、ジャズジャパン(スイングジャーナル)誌、ジャズワールド紙、政経往来誌、フィランソロピー機関紙、航空機内誌「セミソフィア」、早稲田学報…そのすべてをここに紹介する紙面的余裕はないのでお許し願いたい。英語的に表現させていただけば、まさに“You name it.”である。

もう一つ特筆すべき記事はアメリカ大使館作成の小冊子「AMERICAN VIEW」がそのトップで扱ってくれた「日本のサッチモが繋いだニューオーリンズと日本の絆」。大使館のWEBにも掲載された。

電波媒体では、米ABCテレビとニューオリンズのWWLテレビは日米ジャズ交流を密着取材、WWLメインキャスターまで来日した。ニューオリンズのFM局のWWOZなど…。NHK、フジテレビ(ワシントンD. C. 支局長、ニューヨーク特派員らがニューオーリンズへ)大きく扱ってくれている。東日本大震災の避難所前ライブには、各局テレビカメラが放映していた。

末筆になってしまったが、瀬川昌久さん(ジャズ評論家)、中村宏さん(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)、石井一さん(元国土庁長官)、佐藤修さん(ポニーキャニオン会長など歴任)、磯野博子さん(故いッソ・テルヲ氏夫人)、増山律子さん(故増山瑞比古氏夫人)、ヘレン・メルルさん(米歌手)の惜しめない支援をも、ここに特筆させていただく。

いかがでしょうか？ 東京九段ライオンズクラブの支援もあって端を発した、外山夫妻のこの“銃に代えて楽器を！”の運動は、アメリカ本土各地でも次々と産声を上げ、恵子さんが言われているように「ネバー・エンディング・ストーリー」として、限りなく続けられているのです。

“ジャズの王様”ルイ・アームストロングの功績 Vol.2

アドリブ、シェイク、グロウル、グリッサンド…ジャズを彩る表現

———外山喜雄

サッチモが作ったジャズ ABC

ジャズ・トランペットの開祖、いや、ジャズの開祖とも言えるサッチモ。彼が作ったABCは、現代のジャズにまでその基礎として残っている。ここで彼の残した当時のスーパー・ジャズ・テクニク、を見てみよう。

『タターター』リズムから、『ダーダッタ』リズムへ 新しいスイング感覚の誕生

20世紀の始めアメリカにラグタイム・ブームが起こった。文字通りタイム(拍子)をラグ(ずらす)する、シンコペーションの多いピアノ音楽ラグタイムは、黒人奴隷のリズム感覚にヒントを得て生まれたスタイルで、セントルイスの黒人ピアニスト、スコット・ジョプリンの作曲したメイプルリーフ・ラグをきっかけに大ヒットし、国中にラグタイムバンド生まれた。こうしたバンドは、流行曲を昔風の古めかしいスイング感で演奏



し、そのシンコペーションはクラシック的に『タターター』と演奏されていた。これを、その後のジャズに共通の『ダーダッタ』と言う“ジャズのスイング感”に変えたのが、ニューオリンズのジャズのパイオニア達とそれを完成させたルイだった。ルイのスイング感は革命的な影響を当時の軽音楽に与え、まもなく世界中が『ダーダッタ』と今様のスイングするようになるのである。

簡単な例を挙げると、エリントン『スイングしなけりゃ意味がない』の、デュワッデュワデュワデュワ部分のリズム。また、同じくエリントン楽団のクラリネット奏者でニューオリンズ出身のバーニー・ビガードが書いたCジャムブルース。

Gの一音だけでブルースが演奏出来る曲の、ダダッ…ダダッ・ダダッ・ダーダッ、というスイング感を、名プレイヤーの演奏を“すり切れるほど”聞いて“模倣”することが楽しいジャズへの近道だと思う。ルイ以前には、このスイング感の存在しなかったのだ。サッチモやエリントンやベイシーの黄金時代のレコードから、彼の自然で柔軟なスイング感を体にしみこませることで、ジャズの自由さ、しなやかさを身につけてもらいたい。

▲譜例① 「オール・オブ・ミー」でのサッチモスタイルでのフェイク例。メロディに則っているようで、完全に自分の歌い方をしている。この譜例はフェイクと呼ぶよりも一歩アドリブに近いものと言ってもいいだろう

▲譜例② 「ボットヘッド・ブルース」でのアドリブ・ソロ。実際は2小節ごとのブレイクなので、コードは便宜上つけている。この譜面通りに正確に吹いても面白みに欠けるが、サッチモの演奏を聴くと絶妙なタメやノリがあり、不思議なほど脱力感を感じさせてくれる

アドリブの誕生は“フェイク”、ごまかし??!!

ジャズに欠かすことが出来ない即興演奏。自由自在にフレーズを行くってゆくアドリブは魅力だが、もともとアドリブは、譜面も読むことの出来なかった黒人が耳伝えでメロディーを覚えるとき、チョット間違えたり、変わってしまう事から始まった。メロディーを変えることを“フェイク”という。英語で、ごまかす、偽物、等の意味!“アドリブ”の第一歩はフェイク(ごまかし)から始まるノダ(笑)!! ある有名奏者が若い頃カウント・ベイシーのバンドに入った。初めてのソロで張り切って知っている限りのアドリブを吹いたら、ベイシーに“まずはメロディーを大事にした方が良い”と忠告されたという。

以下に、上手にフェイクするか(ごまかすか)、サッチモの演奏をすり切れるまで聴くことだ。フェイク実例 上譜例①

アドリブ

フェイクの感覚を発展させたのが即興、アドリブだ。ニューオリンズの先輩達のフェイクを身につけるうちに、ルイのアドリブ感覚はより洗練され、まもなく彼はより複雑なスイングする独創的なアドリブ奏法を編み出し、その後のジャズに大変革をもたらす様になる。1920年代のポテトヘッド・ブルースは、ウィントン・マルサリスも良く取りあげるルイの画期的アドリブ奏法。曲の和音をもとに、2小節ずつビートがとまるストップタイムの中で、自由なジャズフレーズを作り出してゆく。後のジャズのアドリブの始まり、また、後のジャズのフレージングに大きく影響したジャズ感覚の誕生を感じる若き日のサッチモの代表的演奏だ。この時代のルイの名演、ウエストエンド・ブルースの導入部のカデンツァも当時の画期的アイデアとして時代を先取りしている。この時代のルイの演奏は、アドリブとジャズ語の宝庫だ。

前頁 譜例 ②

“シェイク” “グロウル” “グリッサンド” ジャズを変えた表現

トランペット・セクションが激しく高音で音をふるわせる“シェイク”は、ビッグバンドになくてはならない。このシェイクは、ルイの激しいスイング感が、その喜びの感情とともに爆発するようにラッパからあふれ出した奏法だが、私は体験したジャズ葬式の歓喜の音や、黒人教会の神に捧げる牧師の叫びにそのルーツを感じた。音を出しながら“うなる”と独特のワーオという猛獣の叫びのような“グロウル”効果が出る。また、ラッパのバルブを半分押さえたハーフバルブにして、サイレンのように音を上昇させる“グリッサンド”、逆に高い音からハーフバルブで音をさげる“フォールオフ”とも言う様な効果もニューオリンズ発ルイが完成、スイング時代の重要テクニックとなった。列挙するときがなくなる。高い方の音へ、リットと跳ね上げる吹き方、トイレのつまりを直すプランジャーをベルの前にかざしてワーワーと声のような表現をするのも、サッチモの師匠のキング・オリバーが創始者。その楽器で声を模倣するようなテクニックに、僕は黒人教会の牧師や参列者のかけ声や叫び声の影響を感じてしまう。

もともとアフリカでドラムが声の会話を模倣したように、黒人達は本能的に他の楽器でも声を模倣した。そんなアフリカ感覚が新しいジャズ・テクニックになったような気がする。奴隷として拉致されてきた黒い肌の人々。白人の土地

で生き白人的なものが善、黒人的なものは悪という差別を受ける。そんな中で、どうして黒い肌ではいけないの？ どうして澄んだ音で吹かなければ、歌わなければいけないの？ 俺たちは濁った音、叫び声、笑い声、鳴き声楽器や歌に込めたいんだ。そんな彼らの主張が、画期的なジャズ奏法へと、はぐくまれた背景にあると思っている。

“ハイトーン”

ルイ以前の初期ジャズプレイヤーにとって、トランペットの最高音は架線の上のハイCの音だった。ルイは、当時としては画期的なハイFまでを使い、とたんにトランペットの音域が広がった。(それまでトランペット、または、ホルネットの音域が広がらなかった理由に、音楽家の間で高い音はクラリネットに任せるもの、、クラじゃないんだから、高い音は邪道、、のような考えがあり、昔風の音楽家の職人気質が面白い)

『ワシが高い音を使ったとたんにトランペッターは皆気が狂ったように、ヒーヒー高音で叫びだした。ワシが火をつけたんだヨ』とルイ。

ここにも、ジャズ葬式や教会の牧師の説教がジャズに反映されたことを感じる！！ 強烈な手拍子を打ちながら興奮する聴衆、シャウトする牧師、、その掛け合いがコール&レスポンス(答えあい)しながら歓喜の爆発へ、、、、ルイや全盛期のジャズに良く聞かれるクライマックスだ。ルイの演奏で有名な「明るい表通りで」の最後のコーラスにもそうした影響が強く感じられる！

スキヤット・ボーカルの創始者 サッチモ

アフリカの血とも言える“声を模倣する”ジャズ奏法の誕生と並んで忘れてならないのが、ボーカリストとしてサッチモの存在だ。ルイのようなジャズ感覚で歌を歌った“ジャズ歌手”は、彼以前にはいなかった。ルイはトランペットで開拓した同じスイング感などのジャズ感覚を、ボーカルの才能にも発揮した。“スイングする”彼のボーカル、しかもユ



ニークな“かすれ声”。そのジャズ感覚は、ビング・クロスビー等メジャーな歌手達にも大きな影響をあたえた。そして、ジャズ・ボーカルの父とも言えるルイは、由紀さおりの“真夜中のスカット”で話題となった、“スカット唱法”の創始者でもある。ある日スタジオでヒービー・ジービーズと言う新曲を録音中、持っていた歌詞カードを落としてしまった。とっさにバズズゼ…とアドリブで歌い、そのおもしろさにレコードが大ヒット、以来スカットがブームになった。1926年の事だ。ジャズ歌手の大御所、エラ・フィッツジェラルドもスカットの名手として知られ、サクソやトランペットのソロのような見事なアドリブ・スカットを残している。

ルイがジャズ界に残した“遺産”

ルイ・アームストロングがジャズ界に残した“遺産”は枚挙にいとまがない。それはニューオーリンズのジャズのパイオニア達や、南部北部の黒人達の音楽、またヨーロッパ伝統の豊かな音楽文化がルイの中で“爆発的変化”を起こしたかのようだ。

綿やサトウキビ畑で働く達が口ずさんだ物憂いブルースや労働歌ワークソング、スラム街を行く物売りの声、シャウトする牧師の説教とそれに答える聴衆のうめき声が創り出すドロドロとしたブルーなハーモニー…街を行くブラスバンドが演奏する流行のラグタイムやスーザの行進曲、ロシアの移民のメロディー、イタリアやフランス、アイルランドの民謡…新天地にやってきた、ありとあらゆる文化が発する歓びの音と、アフリカから奴隷として連れてこられた黒人の悲しみ、そして教会の中で彼らが見いだした救い…そんな要素が混ざり合って反応し、20世紀のアメリカから世界への素晴らしいプレゼント、ジャズが生まれた。ルイの演奏には、そんなジャズのロマンとジャズの歴史を作った“ジャズ語辞典”を見るような驚き一杯だ。

ジャズの王様として半世紀

1920年代ジャズの行く道をリードしたルイは、スイング時代の到来と共にデキシーランドスタイルのバンド編成からビッグバンドへとバンド編成を変え活躍を続けた。プレイヤーのソロが少なかったビッグバンド時代は1940年代に下火となり、ジャズに二つの波が起こった。ビーバップからモダンジャズへとつながるモダン化の波と、ジャズの原点復帰とも言えるデキシーランド・リバイバルの波だ。ジャズの基礎を築いたサッチモは、このリバイバルの波に乗

り再び大きな注目を浴びる。1950年代にはアメリカ国務省の音楽親善大使として世界を廻りサッチモ大使と呼ばれた。また大スターとしての道を歩み数々のハリウッド映画に出演、レコード界でも数多くのサッチモの有名ヒット曲が生まれた。1964年にはサッチモの生涯最大のヒットとなったハロー・ドーリーが生まれ、ビートルズのヒットを蹴落としてヒットチャートのトップとなった。不朽の名作、この素晴らしき世界。1968年発売当時は大ヒットとならなかったが、他界して15年以上経過してから大ヒットとなり、没後40年経った現在も世界中で愛されるレコードとなり、ハロー・ドーリーを越える永遠のヒットとなりつつある。“この素晴らしき世界”そしてニューオーリンズの“ジャズ葬式”で演奏されサッチモの名演で有名になった“聖者の行進”。この2曲は、今から500年たっても世界中で聞かれていると私は思っている。500年後も聞かれる音楽は、そう有るものではない。

ウィントン・マルサリスも降参したルイの晩年の演奏！！

1922年シカゴで注目され1971年に亡くなるまで、サッチモは約50年間“ジャズの王様”と呼ばれジャズの第一線で活躍した。1923年から71年まで、歴史的演奏から世界的ヒットまで数多くのヒットを48年間残し続けた。そして彼の映像は、1932年の映画初出演から1971年の最後のテレビショー出演まで40年間、アカデミー賞受賞の映画からエド・サリバン・ショー等々、数多くの素晴らしい映像が残されている。

生涯を通じて素晴らしい演奏を残したルイ・アームストロング。その後年の演奏は、彼がニューオーリンズの先輩達から受けた忠告、『メロディーを忘れてはいけないよ』をそのまま表したような名演で溢れている。

ハロー・ドーリー、ブルーベリー・ヒル、セッ・シ・ボン、バラ色の人生、この素晴らしき世界…。トランペッターのウィントン・マルサリスはこんな事を言っている。『20年代のサッチモのプレイは素晴らしい。しかし、もっと素晴らしいのは彼がトランペットで出す“ニュアンス”だ。バンドのテーマになっている‘南部の夕暮れ’や‘明るい表通りで’見せるあのメロディーの吹き方のニュアンス！ あの世界は私には真似ることが出来ない』

(終わり)

サッチモが愛用した
ホルネットとトランペット

Harry B Jay Columbia Cornet



ホルネット奏者時代にアームストロングが使用していた、シカゴのメーカー、ハリーBジェイ製のモデル1910年代終わりから、キング・オリヴァーのクレオール・ジャズ・バンドを経てトランペットに持ち替えるまで使用していた。ケースにある抜差管と交換すると、B♭管から管になり、バイオリンなどとの共演のために用いられた。この楽器は外山喜雄所有の1920年製同型器。ウイントン・マルサリスの来日時に彼のもとに持参したところ、彼が喜んで淵手というエ



Conn 56B



抜差管にトリガーがつけられている、ピーシューター（豆鉄砲）と呼ばれる細身のモデル。1930年代前半まではこのタイプを使用していた。外山所有の同型モデルは1928年製。ブッシュャーと同様、これもA管にスイッチするロータリーが備えられている。ケース内のミュートも、ブッシュャーと同様に当時の付属

Buescher True Tone 10-22R



ホット5時代に使用したのはブッシュャー・トゥルー・トーン。ロータリー・バルブは、ハリーBジェイのホルネットと同様、切り替えてA管として使用するためのもの。外山所有の同型は1925年製



付属のマウスピースは現代のものよりかなり薄いつくり

「Complete Hot Five & Hot Seven Recordings」のジャケットに写っているのもトゥルー・トーン



H. Selmer Balanced Model



1930年代中ごろから使用していたセルマー・バランスド・モデル。当時のイギリス国王ジョージ5世より1932年に寄贈されたといういわれを持つ。ピストンがベル側によっているのが特徴で、同型のモデルはハリー・ジェームスの使用で有名。後年はいくつかのモデルを変えながらもせるまーを愛用していた。外山所有の実機1940年ごろ生産された同型

慶應義塾の機関誌「三田評論」に寄稿

中村宏さん「私のジャズ遍歴」

(防衛医大名誉教授、ジャズ評論家、賛助会員)

私のジャズとの出会いは、父のダンス音楽用のレコードを、幼少の頃から聞いているうちに、段々とジャズが身近なものとなった。小学校6年生の未だ戦後間もない頃、NHKで河野隆次氏解説の「スイング・クラブ」という番組が始まった。この番組を、毎週ノートを取り乍ら、熱心に聞いてジャズの基本的知識を学んだ。

1947年に「ホット・クラブ」というジャズの愛好団体が誕生した。会長は村岡貞氏で、塾員の牧田清志先生(ペンネーム牧芳雄)、油井正一氏を始め、当時の著名なジャズ評論家の殆どすべての方が会員だった。この会で当時医学部の講師だった牧田先生(後に東海大学医学部教授)と親しくなり、慶応に行けばジャズが聞けると早合点し、将来は理工学系に進学する予定だったのを、急遽方針転換して、医学部を受験することになった。

慶応に入学後、出来たばかりの「慶応ライトミュージックソサエティ(KLMS)鑑賞部」に入った。部員は代表者のH君と、その時一緒に入部したM君のたった三人だけだった。

ホット・クラブで我が国初のジャズ講座を開催しようという気運が、油井正一氏を中心として盛り上がっていた。ホット・クラブが主催するのは困難だったので、KLMS鑑賞部が主催、ホット・クラブが後援という形で行なうことになった。ところがこの準備中に、鑑賞部代表のH君が部費を持ち逃げして、雲隠れしてしまった。二進も三進も行かなくなり、新たに牧田清志先生を会長、油井正一氏を顧問にお迎えして、「慶応軽音楽鑑賞会(KKK)」を立ち上げるようになった。ジャズが中心だったが、その他の軽音楽も加え、それぞれの分野で有名な方々を解説者にお迎えして、設立記念レコード・コンサートを日吉キャンパスの50番教室で開催したところ、250名の新会員を集めることが出来た。

1955年10月から8回にわたり、隔週に三田キャンパスで我が国最初のジャズ講座を開催した。講師は、会長、

顧問の他、野川香文、野口久光、河野隆次、藤井肇氏等、権威者ばかりだった。未だジャズ評論家の卵だった、いソノてルヲ、大橋巨泉氏も毎回聞きに来ておられた。

KKKは毎月貴重なレコードを持ち寄ったり、有名な解説者をお招きして、レコード・コンサートを開いていた。夏休みには夏場は安いスキー場に宿泊してジャズを聞いたり、夜遅く迄ジャズ談義をしたりして合宿を開いていた。しかしレコードが容易に手に入ると、部員は段々

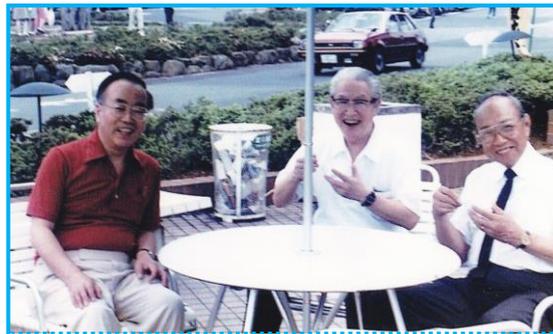
減少し、現在学生部では休部中となっているそうだが、OB会は今でも年に二、三回開いて旧交を温めている。

医学部卒業後、アメリカの進歩した臨床医学を勉強するためと称して、1962年にニューヨークのマウント・サイナイ病院にレジデントとして、1966年から2年間、コーネル大学

にリサーチ・フェローとして留学した。医学の勉強のためというのは表面上の理由で、本心はジャズを聞きに行くためだった。当時は外為法のため、円を持ち出すのは難しく、アメリカへジャズを聞きに行く等ということは不可能に近かった。留学の間にも、毎年学会に出席してニューヨークを訪れていたのも、60年代の生のジャズ演奏をニューヨークで聞いた数少ない日本人の一人となった。

1963年のニューポート・ジャズ・フェスティバルにも行ったが、この年のフェスティバルを聞いた日本人は多分私だけだった。当時の体験は「ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話」という単行本に書いて、DU BOOKSから昨年出版した。

定年後は外山喜雄、恵子夫妻が主催する日本レイ・アームストロング協会が毎年夏に行っていたニューオリンズの子供達に楽器を寄贈するというボランティア活動に二十回参加したが、それが認められて、昨年9月ニューオリンズ市長から表彰状を頂くという光栄に浴した。



KKKのOB会で油井正一氏(中央)と筆者(左)



ニューオリンズ・ウエストエンドで外山夫妻(中央)を囲んで=前列、左から2人目が筆者

2017「新春！デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」 Vol.9

今年も伝統の5大バンドが競演、ゲストに北村英治さん

1月7日、めぐろパーシモンホール大ホールで華やかに開催、課題曲は「森の小径」

♪年の 最初の ためしとて 終わりなき世の めでたさを…今年も外山喜雄さんの「1月1日」の歌声で幕を開けた2017年「新春！デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」は1月7日、昨年に次いで東京・目黒区のめぐろパーシモンホール大ホールに日本のデキシーバンドを代表する有馬靖彦とデキシージャイブ、デキシーキャッスル、中川喜弘とデキシーサミット、外山喜雄とデキシーセインツ、園田憲一とデキシーキングの5バンドが結集、例年のようにゲストとして北村英治さん(c)が加わり、華やかに開催された。

(写真撮影:相馬威宣)



りに、「ハインサエティ・カリプソ」、「セントジェームズ病院」…粉川さんがラッパを外して、ワンカップ大関の空きビンを当てた妙技がソフトに会場に響く(写

セインツはジャケットをスカイブルーに新調 課題曲は外山さんらしいユーモアでの熱唱

今年の課題曲は「森の小径」。昭和15年に作られ、灰田勝彦さんが歌って大ヒットした曲。<淡い初恋の記憶を懐かしみ、恋する喜びがあふれている名歌～もう一度あなたの初恋を思い出してみませんか～>とチラシに書かれていたが、参加5バンドはそれぞれ“初恋”を胸に思い思いの好演を繰り広げた。

デキシージャイブからバンド演奏が始まり、デキシーセインツは4バンド目にステージに上った(写真上)。レ

ギュラーメンバーで外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、広津誠(cl)、粉川忠憲(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)の皆さん。新年にふさわしく全員がお揃いのスカイブルーのジャケット姿で登場、「ハロー・ドリー！」を皮切



真左下)。「キャラバン」ではサバオさんのドラムソロの熱演が喝さいを浴びた(写真上)。そして



ほろほろ こぼれる白い花を うけて泣いていた 愛らしいあなたよ…課題曲「森の小径」は、外山さんのボーカル

入り。恵子さんとの初恋を思い浮かべながら！？の熱唱だった(写真中央)。歌詞の最後が何やら♪リンゴの木の下で…のメロディーになってしまった。何とも外山さんらしいユーモア。

しんがりを務めたデキシーキングスはゲストの北村英治さん、87歳！を迎えての演奏。北村さんは(次頁に続く)



(前頁からの続き)「懐かしのニューオリンズ」「シャイン」の2曲を感動的な演奏で締めくくった(写真下)。

今年も全バンド総出演の壮大なフィナーレ ドラマー大熱演のシング・シング・シング!

フィナーレは、例によって出演全バンドが楽器ごとにまとまってステージに上っての壮大なフルバンド(写真下段=指揮:

中川喜弘)。「アット・ザ・ジャズ・バンド・ボール」「南部の夕暮れ」「オール・オボ・ミー」と続き、「シング・シング・シング」では、ドラマーが入れ替わって、これでもか、これでもか…といった叩き合いの競演となった。フィナーレはもちろん「聖者の行進」。外山さん、バンジョーの恵子さんをはじめ全員が会場回り、ファンと笑顔の交



流(写真右)、2017年ジャズの幕開けにふさわしいジャンボリーを締めくくった。



会場ロビーには、スタッフによる販売コーナーも設けられ、セインツや恵子さんのCDがしっかりと売り出された。



終わって昨年同様、目黒駅近くのレストランで外山夫妻を交えてスタッフらの打ち上げ交流会がにぎやかに繰り広げられた。皆様本当にご苦労様でした。

ありがとうございます

◆東京九段ライオンズクラブ様(千代田区) 金一封

ジャズレコード初吹き込み 100周年記念 斑尾ジャズ 2017 デキシーバンド参加募集

ニューオリンズで生まれたジャズが世界へ羽ばたいたきっかけは、1917年2月26日のオリジナル・デキシーランド・ジャズ・バンドによるジャズのレコード初吹き込みでした。ニューヨークで吹き込まれた2曲は”Dixie Jass Band One Step” & “Livery Stable Blues”で大ヒットを記録しました。さらにバンドリーダーのニック・ラ・ロッカ作曲の”Tiger Rag”や”At the Jazz Band Ball”などがヒット曲となりました。

斑尾ジャズは夏の高原のジャズフェスティバルとして11年目を迎え、同ジャズ実行委員長の新山敏さん(WJFフレンド会員)は「ジャズレコード100周年に、ぜひデキシーバンドに参加していただきたい」と呼びかけています。WJF理事の山口も第1回からMCスタッフとして協力しています。

【日程】2017年8月19日(土)~8月20日(日)

【場所】斑尾高原特設野外ステージ、斑尾高原ホテル テラス

募集要項は URL: <http://www.madaraojazz.com/> をご参照ください。(山口記)

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

一般会員(General Membership) ¥6,000
学生会員(Student Membership) ¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店
普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax: 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Googleで

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

1917年、世界初のジャズレコード吹き込みから今年で100年。ジャズが世界に広まったのは当時の新技術メディア、レコード、ラジオ、映画などが大きな役割を果たしました。▼今回の会報トップ特集は「銃に代えて楽器を!」。23年間にわたるこの運動は会員の皆様をはじめ国内外のジャズを愛する方々のご協力と援助に支えられてのことでした。▼そして新聞、雑誌、テレビ、WEBなどの多くのマスメディアが私たちの運動を記事やニュースで取り上げたことも、この運動の大きな後押しとなりました。英字紙ジャズ・タイムズの記事は米国で大きな反響を呼びました。ニューオリンズの地元新聞「タイムズ・ペキーン」は22年間にわたって外山夫妻とWJFの活動を記事で紹介しています。駐日米国大使館も元大使のジョン・ルースさんのツイッターや大使館発行の小冊子「AMERICAN VIEW」での紹介が海外での知名度にだけプラスになったか計り知れません。▼100年の5分の1強年月のWJFの活動が着実に成果をあげてきていることに、応援していただいている皆様に感謝です。(山)

編集長から